

出 会 い (その2)

光る沙 漠

水柱から溜る鹽たらひの水は冷く、お弁当のトマトが密かに冷やしてあったり、はんかちに包んだ牛乳瓶がたてかけてあったりした。その水に手拭をつけては頭の上のせて話を聞いている人もいた。冷房完備の多い現在では考えられないが、本気で自ら学ぶのには相応し



蕪 木 寿 江

いお茶大の講堂であった。次の年の夏は真中の前から三番目という特等席を陣取った。千五百人いたのだろうか、折たたみ椅子もでて身動きもできない空気の中で周郷先生の話聞いた。そして、「光る沙漠」の矢沢幸を知った。

ききょう

十四歳

おまえは

本当に健康そうだね

つぼみは

ちよっとさわれば

はじけそうだね

あきらめ

十五歳

あきらめてはならぬものを

あきらめて

あきらめてよいものを

あきらめず

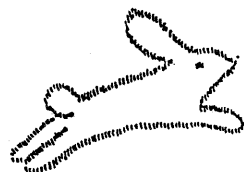
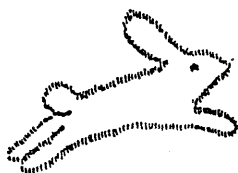
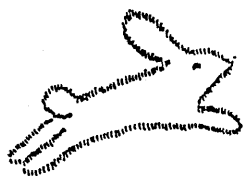
こんなのがわたしの

なやみのたねになっているのでしょうか？

おれの中に……

十六歳

もう一人



すばらしい

人間がいて

そいつと

しっかり

手をむすんで

生きて

行きたい

まよい

十六歳

さわると手のきれいなやうないとを

心のなかにはってまよいをくいとめたい

詩を書くから……

十六歳

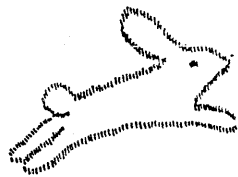
詩を書くから悩むのか

悩むから詩を書くのか

そうだ俺は悩むから

詩がうまれるのだ

幸少年に語りかけるような先生の低い声に、一言ものがさずとノートをとった。帰りの電車の中でも広げては何べんも小声で読んだ。その詩の中にすっぽり入り込んで一時間余りの電車を降りた時には、自分が又違う世界からきたような気さえした。幸君は小学校も五年の二期期までやっと通い、二十一歳の若さでこの世を去る迄、何がこの少年を育てていたのか——。死後幸君のお母さんが、当時(四十二年)毎日新聞に連載していた「母子のうた」の担当をしていた周郷先生に十二冊の詩のノートを送ってこられた。詩人の多い中で先生を選ばれたところに人との出会いの神秘さを思う。先生に出会わなかったら五百編の詩も、十四歳の十一月三日から一日も欠かさず書き続けた日記帳も、そのまま新潟の彼の家に蔵まわれていたかもしれない(高校や病院の先生方で小さな出版はあったが)。



先生の恩師である内藤濯先生も、邦訳した『星の王子さま』に比べ得るものだと言われ、「矢沢君は自分の中に学校を持っていた」と話されたと伺った。

僕から

十六歳

僕から

イエス様を

とり去れば

僕は灰になる

僕から

詩を

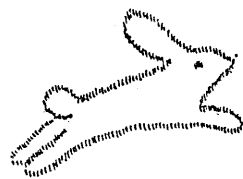
とり去れば

僕は灰になる

「光る沙漠」のあとがきにも、

『君の詩は、(戦後の)日本語の退廃、崩れを救ってくれる！ それは日本人を生きかえ

らせることだ。「詩がよくならない限り、日本の教育も政治も望みはもてない」親しかった詩人山之口鎮さんと私は、生前、敗戦後間もない時分、池袋のコーヒーマートの店でよくこんな話をしていた。いま私はそのことを思い出す。君はそれをやってくれた。しかもそれらの詩の大半は、まだ殆んど寝たつきりの十五、六歳のころに書かれたものだった。「学歴」などはなんの関係もない！——これはまったく驚くべきできごと(event)だ！ 私は、十五、六歳という年齢がどんなに大切な年齢かを改めて考えてみた。そうして幼年時代の自然との対話の大切さを……これは誰にも、振りかえってみて、思い当ることだろう。イエスは十二歳になって、神の子であるという覚醒をみせ、孔子は「われ十五にして学に志し」と言った。それを、この年齢で試験勉強という「獲得競争」にこの大切な時間を



使うとは、なんたることだろう。「獲得のための教育」はもう「じつは」終わっている！

——「死んで」いる、のに……。」

一本のすじ雲

十四歳

このはてしない青空に

何かと何かを結ぶかのように

夕日で銀色にそまる

僕は好きだ この一本のすじ雲が

『この「……何かと何かを結ぶように／夕日で銀色にそまる……」すじ雲」に、君は「いのち」というもの、宇宙に遍満する「愛」のすがたを見たのだろう。この翌年の盛夏に、君に「詩」をえらばせ「日記」を書かさせる決意をさせた。』

『君の詩は伝説のように大きく深い調べがあり、中原中也や八木重吉、啄木の影響をつよ

く受けたが、それらを越えて、まったく新しい現代のものだ。シモーヌヴェイユが「ロンドン日記（一九四三年）」に書いている「詩」の定義「アタンション（attention）を磨き、ときすまし、それによって人が宇宙を冥想しそこへ参加する」が、君の詩にぴったりしているように思われる。君は死とたたかい「死との対話」を通じて「あきらめる」のところがった道を選んだ——人間を超える道を……。』

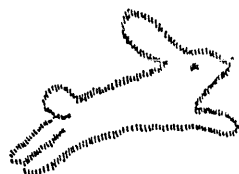
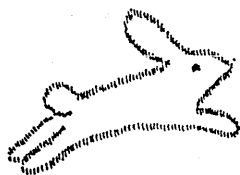
『十六歳の四月二十一日の「日記」から、八月にかけて「神学問答」「宇宙論」のようなかたちで展開される。拍手を送りたいほどだ。私は、そういう若い君にティヤール・ド・シャルダンの片鱗を感じるのだ。』

小道がみえる……

二十一歳

小道がみえる

白い橋もみえる



みんな思い出の風景だ

然し私がない

私は何処へ行ったのだ？

そして私の愛は

（絶筆）

『私は君との「出会い」を今さらのように感謝したい。この「出会い」をみんなのものにする仲立ちができたことを心からよるこびとする。』

すっかり先生に魅かれ、先生が講師の夏期研修会場を探し、紙聞紙上で見つけた長野県で行なわれる朝日保育大学に行った。市ヶ尾の御一行様（？）の泊る部屋は、その日迄物置になっていたところで夜はゴソゴソとねずみとごきぶりと蚤の襲来——。寝不足のまま諏訪の会場に向い、聴いている時は不思議と

かゆみはなく、休みの時間はかゆくて眠くて困った。先生は二度同じ講演はなさらず、常に学んでいらっしやることをお話なさるので、この日にはこの日のことしか伺えず、誰もが集中し全身神経になった。

秋風が立ってもかゆみは去らず、搔いては先生を思い出していた。

(市ヶ尾幼稚園)

引用図書

『光る沙漠』(童心社) (沖積社)

『足跡』(童心社)

